第 43 回　防災教育としての神話

ＩＴ生

このところ、天皇譲位にからみ、神話を調べる作業をしている。

今上天皇が、災害の被災地に赴く姿が、話題になるが、あれは美談ではなく、古来、天皇家の政の中心なのだ。

東日本大震災で、同規模の地震として話題になった「貞観地震」（８６９年、平安時代）ののち、当時の天皇は、被災地の救済と復興をいの一番に呼び掛けている。

このころの一連の地震は、近畿でもあり、東北の貞観地震とあいまって、災害後の被災地で発生した疫病対策として、祇園祭が始まったとされる。祇園祭の主祭神は、スサノオ（牛頭大王）、つまり、雷神・地震神である。この前後の時代は、富士山や阿蘇山の噴火、南海地震と連発していることから、日本列島の地殻変動の時期だったのだろう。

現在の日本がこのころに似ているという指摘もある。スサノオといえば、出雲のヤマタノオロチ退治でも知られる。ヤマタノオロチとは、実り豊かな扇状地で起こっていた土砂災害の化身である。古代人は、得体の知れぬ災害に立ち向かう術として、災害を擬人化し、姿を与えることで、恐れ祭ることで、人々の心の安寧を保ってきた。その神主役が天皇だったのだ。

六甲山上の「磐座」のひとつをまもる芦屋神社

見逃されがちだが、今上天皇の慰霊祭での被災者への言葉には、必ず、「日本の災害の歴史、自然地理をよく学び、備える心をもつことが大切だ」とある。万世一系とは、血筋のはなしではなく、日本人が生きのびてきた智恵の伝承ととらえるべきだろう。

ところで、六甲山の山上にはいくつも神が降臨した場所、もしくは神をまつった場所である「磐座」（いわくら）がある。六甲山の周囲にはいくつもの巨大断層があり、もろい御影石がくずれて土砂災害、水害を起してきた。山崎断層がとおる姫路には牛頭大王の本拠廣峯神社がある。これらの神をまつる里宮が阪神間には多く存在する。こうした宮をめぐることを通じて、災害への意識をたかめる機会とすべきだろう。

（平成 31 年 2 月）